

オンライン会議システムを活用した海外日本語学科の学校訪問の試み —台湾国立屏東大学応用日本語学科と大阪府門真市立大和田小学校5年生との交流—

I. Onlineによる台湾屏東大学応用日本語学科の門真市立大和田小学校への学校訪問概要：大阪教育大学多文化教育系国語教育部門は、台湾国立屏東大学の応用日本語学科の授業「日本語作文」（傅玉香准教授担当）を、オンライン会議システムを用いて、門真市立大和田小学校5年生のクラス（立林健太郎教諭担任）との交流を実施した。このプログラムは国語教育部門で推進している海外大学日本語学科と連携した授業支援のコンテンツの一つである。Onlineによる小学校訪問は、2020.12.23の4時限目に実施し、屏東大学の学生40名、大和田小学校5年生40名が参加した。屏東大学の学生の日本語能力はN2～N4（日本語能力試験）であり、日本語能力に差があることを前提にして交流内容を組み立てた。交流実践の内容は、下表のようである。

目的は、相互の教員間の研究教育の連携を基に、国語教育の観点と経験を活かした、海外日本語学科の日本語教育授業現場に対する支援の在り方、授業コンテンツの開発を図ることである。

公立小学校において日本語を媒介したOnline学校訪問の活動は、通常の英語を媒介とした英語学習を兼ねた国際交流ではなく、**異文化圏の人々との交流そのこと自体での学びに焦点がある**。現在なされている留学生や国内在住外国人との交流の他に、**Onlineによる日本語を用いての国際交流が可能であれば、多くの小学校で国際交流の敷居が下がるのではないだろうか**。そこで日本語学習者であり、一定の日本語能力を有する海外大学の日本語学科の大学生に着目した。日本語学習者にとっても、実践的に日本語を用いた日本語・日本文化の学習の機会となる。

オンライン会議システムとして、屏東大学で採用されていて、教員、学生ともに習熟しているGoogle Meetを採用した。

時程（日本時間）	action	活動内容	活動形態	担当者	
10:50 J	接続確認	映像・音声等動作確認	real	江川・立林・傅	
11:00 J	開始・挨拶	教頭先生挨拶	real	教頭・江川	
11:05 J (35m)	【大和田小学校】 小学校紹介 大阪紹介 学校文化紹介	① 大和田小の紹介 ② 大阪の紹介 ③ 大阪弁紹介 ④ 給食の紹介 ⑤ 一輪車紹介 ⑥ 大縄紹介	写真・時間割表・原稿 写真2枚・原稿 フリップ・原稿 写真1枚・原稿 動画・原稿 動画・原稿	real 動画 real 写真 real フリップ real 写真 real 動画 real 動画	立林・江川
11:40 J					
11:40 J (30m)	【屏東大学】 大学紹介 台湾紹介 交流	① 屏東大学紹介 ② 台湾紹介 ③ 小学生に台湾語を教示（ゲーム） ④ 中華ゴマ ⑤ けん玉で交流 ⑥ 小学生の質問返答	動画 動画 小学生に教えてもらう 実演 小学生に教えてもらう （質問は事前に送付）	real 動画 real 動画 real 動画 real 実演 real 実演 real	佐藤・立林
12:10 J (5m)	まとめ おわりの挨拶	① 交流のまとめ ② 一緒にクリスマスの歌を歌おう。（Jingle Bells） ③ 児童・学生 感謝・お別れの挨拶	real real real	佐藤 立林・傅・江川	
12:15 J					

（記録画像・映像：江川，傅，井上 事後アンケート：井上，傅 大和田小学校交流児童保護者事前説明：立林）

II. 台湾国立屏東大学応用日本語学科の視点—Onlineによる日本国小学校との交流の成果と課題—：交流活動の有効性を確認するために、アンケート調査及び作文の内容分析を実施した。「Online小学校訪問に参加して楽しかったですか」という質問に、9割以上の回答者は「とても楽しかった」と答え、満足度が高く、交流は有意義だったと認めていた。また、今回の交流は「日本語作文（一）」授業の一環として行なったので、履修者全員に5W1Hの書き方を用いたオンライン交流の紹介、参加した感想を書かせることによって、異文化交流を体験し学んだことを検証した。学生の書いた感想は、このようなポジティブなものが多く、交流活動に対して高く評価したことが分かった。

一方、2019年夏に実際に当該小学校に行つての体験感想と比較すると、その違いは大きい。現地に足を運ぶと、実際に触れ合つて感情の交流ができ、学校内の雰囲気から、授業の様子、当日の天気まで肌で感じる事が可能である。いわゆる体感というものができる。それに対して、Online交流にもメリットがある。例えば、事前に伝えたいことや相手の質問に対しての回答などをしっかりと考えて準備した上で、日本語で伝えることができるので、**日本語学習や思考力訓練のモチベーションになる**。

今後の課題は、今回の交流で足りなかったところを改善してオンラインでの効果をさらに引き出し、**持続的な学習方法として確立する**ということである。もちろん**現地体験も必要性がある**。二つの交流方法を合わせて運用すれば、最も効果的ではないかと思う。

III. 門真市立大和田小学校の視点—Onlineによる海外日本語学科との交流の成果と課題—

交流プログラムの準備段階から、5年生の児童はどの子も目を輝かせて活動に参加していた。外国の人との交流はワクワクするものである。実際、画面に現地の大学の教室が映し出されると、児童たちの興奮は最高潮に達した。教室にしながら、1000キロも離れた台湾の学生とリアルタイムで交流している。このような不思議な感覚に包まれるのは初めてのことである。世界との距離がぐんと縮まったように感じられた。これからの時代、児童たちはこのような交流の機会を多く持てるようになるだろう。さまざまなコミュニケーションツールを獲得し、国際感覚が磨かれていくことが期待できる。Onlineでの交流では、こちらのアクションに対する学生からのリアクションがありがたかった。拍手や○×のハンドサイン、何よりもリアルタイムで返ってくる「おお～っ！」というどよめきの声に、どの子の表情も緩んでいった。やはり、反応が返ってくることは達成感につながり、その後の児童たちの聴き方にも変化が見られるようになった。友だちの発言に対して、聞き手としてしっかりと反応できるようになっている。「相手に伝わった」という満足感は、聞き手あつてのものであるからだ。**遠く離れた外国の学生との交流プログラムは、コミュニケーションツールの獲得、国際感覚の醸成、そして「伝え合う」力の育成という点で大きな効果があつた。**

一方、課題としては、同じ空間で同じものを見て、聞いて、感じる事ができないことである。画面越しにはわからない会場の空気感や、画面に映らない他の参加者の様子等々は、空間を共有しないと感じられない。また、大和田小学校のOnline接続環境の整備や教員の技術的な力量など、改善すべき点は多く残っているが、これらの課題は今後の交流を重ね、経験を積んでいくことで十分に改善できるだろう。Online交流と現地交流のよいところを組み合わせ、継続していくことが必要。

IV. まとめと課題：**Onlineを活用した屏東大学応用日本語学科との交流は、屏東大学、大和田小学校ともに教育効果が認められた。**小学校においては、国際交流の経験というだけではない学びがあつた。国語科の学習として捉え直すと、特に説明文教材の読解活動で習得した表現や表現形式を用いた表現活動、伝え合うことを志向した「聞く・話す」領域のスキルの実践の機会となった。資料を集めたり、説明のための原稿を作成したすることは、授業で習得した諸スキルを活用することになる。明確な相手意識と目的・意図をもった言語活動であつた。工夫して、作り上げたコンテンツに、相手がよく反応してくれたことで、伝え合う楽しさ・喜びを体験することができた。**日常の学びが活かせる機会を持つことは、学びの意義が再認識されることになり、学びの動機づけにはたらく。**

目的に即したコンテンツをつくりには、相当の事前の準備時間が必要である。小学校の場合には、通常の授業や学校行事等との調整と準備時間の捻出が必要となる。交流媒体として使用するICT機器の接続テストを試行錯誤して、操作方法の習得、操作の迅速化、ハウリング防止を図っていった。それでも当日に接続の不具合が生じた。交流自体に集中するには、複雑な操作を繰り返すよりも単純な操作を組み合わせる方が安定する。交流現場では「盛り上がる」ことが必要であるが、「盛り上がって」もコロナ感染防止に配慮したより徹底した方法を工夫していかなければならない。



屏東大学応用日本学科交流風景



門真市立大和田小学校交流風景